龍谷大学　授業内容と計画

第1回 李洙任（龍谷大学経営学部教授） 9月23日
「等質社会をよそおう日本社会に新しい風を吹き込む活動」
内容：等質社会をよそおう日本社会に新しい風を吹き込む活動と、国籍という枠組みにとらえられない文化空間の存在を提唱し、多文化共生の視点から移民政策、国際結婚、労働者問題などの国籍に関わる問題を紹介する。東アジア地域でEUのような共同体が可能かどうかを考察する。

第2回 田中宏（龍谷大学社会科学研究所（客員研究員）一橋大学名誉教授） 9月30日
「入管法の大幅「改正」のほか、高校の無償化など外国人学校をめぐる問題」
内容：1980年代の教科書問題以降、慰安婦問題、靖国問題、領土問題等、日本を軸とする東アジ半世紀前にアジアからの留学生に出会い、その後、本講師は、在日韓国・朝鮮人や留学生、労働者、難民などを取り囲む「壁」を打ち破るために、長年にわたって尽力してきた。最新のデータとともに、入管法の大幅「改正」のほか、高校の無償化など外国人学校をめぐる問題についても語る。

第3回 戸塚 悦朗（龍谷大学社会科学研究所（客員研究員）元龍谷大学法科大学院教授） 10月7日
「朝鮮・韓国人の戦時強制連行問題と「従軍慰安婦」問題」
内容：韓国人慰安婦の対日補償請求運動を支援し、1992年2月国連人権委員会で、朝鮮・韓国人の戦時強制連行問題と「従軍慰安婦」問題をNGO「国際教育開発」の代表として初めて提起し、日本政府に責任を取るよう求め、国連の対応をも要請するなど、今日の慰安婦問題に多大な影響を与えた、など経験談を交えて講義する。

第4回 牧野 英二（法政大学文学部教授） 10月14日
「安重根をテロリストと見る日本や西欧の一部の視点に対し、くさびを打ち込む」
内容：安重根はテロリストではない。むしろ、日本帝国主義の韓国侵略を主導した伊藤博文をはじめとする日本政府の要人や軍人こそがテロリストだ。安重根は、これら日本のテロリストと、“テロ国家”日本帝国主義に対する“対テロ戦争”を起こした人物である、など当時の時代背景や人物像に焦点を置くと歴史の全体像が見え、歴史をどうとらえるかを哲学の視点で考察する。

第5回 中村 尚司（龍谷大学社会科学研究所（客員研究員）龍谷大学名誉教授） 10月21日
「日本と隣国であるアジア諸国との交流の促進と民際学を中心に据えた社会啓発」

内容：民際学を提唱し、19 世紀以降の社会科学に根深く存在する近代国家の枠組みと主観・客観の峻別を乗り越え、研究者の当事者性を重視している。日本と隣国であるアジア諸国との交流の促進と民際学を中心に据えた社会啓発について講義する。

第 6 回 中川 慎二（関西学院大学経済学部教授） 10 月 28 日
「異なる言語から異なる文化について研究発展」
内容：「授業分析」、「言語教育における異文化間学習」、「学術的ディスカッションの談話分析」、「海外の日本人コミュニティ」などの研究テーマを通して「話されたことば」をデータとしてジャンル分析を行っている。異なる言語から異なる文化について研究発展を行っている。またドイツがどのようにフランスと信頼関係を構築できたかなど EU 形成前の当事者たちの状況を理解する。

第 7 回 李 泰鎭（ソウル大学人文学部国史学科教授） 11 月 4 日
「過去の問題ではなく、われわれの未来の問題としてとらえる」
内容：長年、韓国の歴史を研究されてきた。来日時に「日韓併合が正当化された結果、多くの歴史が歪曲されている。この状態では真の和解はなされない。東アジアの平和のためにも、過去の問題ではなく、われわれの未来の問題としてとらえるには何が必要かを講義する。

第 8 回 平田 厚志（龍谷大学社会科学研究所（客員研究員）龍谷大学名誉教授） 11 月 11 日
「アジアと世界平和に寄与した安重根の偉大さ」
内容：安重根の東洋平和論についてさらに詳しく知ると、祖国を求めるだけなく、アジアと世界平和に寄与した安重根の偉大さを、日本人として当然学ばなければならないと考える。秀吉の朝鮮侵略を宗教の視点で考察し、朝鮮植民地時代には真宗が人的移動を活発化し、朝鮮半島における宗教活動を繰り広げたことなど「宗教と戦争」、また「宗教伝道と植民地支配」との関係性を語る。

第 9 回 殿平 善彦（浄土真宗本願寺派一乗寺住職 強制連行犠牲者遺骨発掘事業） 11 月 18 日
「日本、韓国、朝鮮、アイヌの若者の懸け橋」
内容：本講義者は、大戦時に韓国から強制連行され、鉄道やダムの労働者となり、北海道で亡くなった韓国人強制労働者の遺骨発掘事業を長年取り組んでいる。その発掘事業を通じて日本、韓国、朝鮮、アイヌの若者の懸け橋という重要な役割を担った。殿平ご住職は龍谷大学出身の僧侶であり、死者を弔うという僧侶の責務を実践されてきた。本講義者の経験を通して、平和活動とは何かを講義する。

第10回 重本 直利（龍谷大学 経営学部教授） 11月２５日
「経営とは「いかに管理し組織するか」」
内容：経営とは「いかに管理し組織するか」であり、企業経営のみならず学校経営、文化経営、福祉経営、家庭経営など、経営は多様であっても、「共生」という考えが基本となる。今日必要とされるのは「共生」を基本理念とした経営学である。「共生」は龍谷大学の建学の精神であり、隣国との「共生」が実践されなければ、グローバル市場で成功は収められないという考えから、アジア共同体の可能性を経済的視点で語る。

第11回 勝村 誠（立命館大学政策科学部教授） 12月2日
「一国史的な枠組みを超えて東アジアの国際関係の中で捉え直す」
内容：本講義者は、大韓民国釜山広域市の東亜大学校で石堂研究院の研究員として韓国近現代史と韓国政治について研究した。その経験に基づき、日本政治史研究を一国史的な枠組みを超えて東アジアの国際関係の中で捉え直すことを講義する。

第12回 Tessa Morris- Suzuki（オーストラリア国立大学教授） 12月9日
「日本の「女性活躍推進」政策の醜悪な面」
内容：日本が活発なリーダーシップを発揮して戦時下性暴力をなくしていくことは、国際社会から歓迎されるだろうし、実際にいま大いに必要とされている。しかし日本が、女性に対する過去の重大な暴力を否定しているあいだは、またその歴史について語る自国民たちを攻撃し抑圧している限り、この主導的役割を果たせはしまい。民族や国家の境界を越え、新しい地域協力や市民社会のあり方について考える。

第13回 趙 東成（安重根義士紀念館館長、ソウル大学名誉教授） 12月16日
「安重根義士の思想についての理解をめぐる」
内容：テロリストについての定義であるが、テロリストとは自分の目的を達成するために、その目的とは関係のない不特定多数の人々、罪のない一般人も巻き込んで殺傷する場合、その行為者はテロリストだという。つまり、安重根義士はテロリストではない。本講義者は、安重根の母方の末裔である。敬虔なキリスト教徒であった安重根の実像に迫る。

第14回 佐藤 洋治（一般社団法人ワンアジア財団理事長） 1月13日
「将来に向けたアジア共同体の創成に寄与することを目的」
内容：現在アジアは、政治・経済・文化など様々な分野において、世界で最も注目されている地域のひとつである。アジア社会は文化的・歴史的・社会的に共通性・親和性を有している一方、多様で異質的な側面も多く含んでおり、アジアの近・現代の歴史には、国家の壁・国境の垣根を乗り越えることができず今日に至っていることは否めない。当財団が目的と

する活動は、かならずやアジアのみならず世界の平和と安定、発展に貢献をなしうると学術活動の理念を語る。

第15回 鄭 俊坤（一般社団法人ワンアジア財団主席研究員） 1月20日
「いまなぜワンアジアなのか？」
内容：「競争」から「共存」へ。人種・民族・国籍の壁をどう乗り越えるか。いま、なぜアジア共同体なのか—その原点を考える。アジア共同体の形成と市民社会の役割。アジア共同体の創世に向かって、やがて世界はひとつになると予想しながらグローバル市場に取り組むと若者の心の中に光が見えるのではないか。過当競争や不必要な紛争で市場の奪い合いを基本とする考えから「共存」でアジア市場の繁栄につながる考えをもつことが重要である。

※講義日程および内容は講師の都合等により変更になることがあります。